

## 【実践報告】 短期プログラムにおける文化体験の テキストの開発 : 対面とオンラインのハイブリッ ド文化体験に向けて

著者	長谷川 由香, 村田 晶子, 池田 幸弘, 竹山 直子
出版者	法政大学グローバル教育センター日本語教育プログラム
雑誌名	多文化社会と言語教育
巻	1
ページ	46-58
発行年	2021-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00024429">http://hdl.handle.net/10114/00024429</a>

doi: info:doi/10.50921/jlp.1.0\_46

## 【実践報告】

## 短期プログラムにおける文化体験のテキストの開発

## —対面とオンラインのハイブリッド文化体験に向けて—

## Developing Cultural-Experience-based Textbook for Short-term Programs:

## Towards the Hybrid Cultural Experiences between Face-to-face and Online

長谷川由香・村田晶子・池田幸弘・竹山直子

## 要 旨

高等教育のグローバル化が進み、留学の形も多様化する中で、近年注目されているのが、1か月未満の短期留学プログラムである。短期の留学プログラムは経済的、時間的な負担が少ないために参加しやすく、その重要性は増している。

短期プログラムは、学生の休みの期間に実施されることが多く、教室での勉強だけでなく、体験学習を組み込んだプログラムが実施されており、これまでプログラムレベルでの実践報告を通じて、具体的な実施例、効果や課題が明らかにされているが、その一方で文化体験の「テキスト」の開発に焦点を当てた報告は非常に少ない。

そこで本稿では、こうした文化体験プログラムのテキスト開発について分析し、大学の短期プログラムを想定したテキスト開発がどのように変容していったのかを検討し、今後に向けたオンラインでの文化体験のアレンジ例の提案も行った<sup>1</sup>。

**キーワード：**短期プログラム、教材開発、オンライン文化体験

## 1. 短期文化体験プログラムの背景

短期の言語文化プログラムは夏休み、春休みなどの休みの期間に行われることが多く、限られた時間で言語学習と文化体験の両方をカバーできることから、言語と文化を組み合わせたプログラムは学習者の評価が高く、日本語学習の動機付けにもつながると指摘されている（藤森・宮城・中村・荒川 2013、松尾・福富・加藤・初鹿野・椿・徳弘 2018）。文化体験に協働学習の要素を取り入れて、日本語授業、交流授業、文化講義、文化体験が連携したプログラムデザインも多い（阿部・釜淵・吉兼・柳 2015）。また、言語学習と体験学習の連動は、コンテンツを重視した言語教育（Content-based Instruction; CBI）の枠組みとも深く関わっており、インプットを与えるだけでなく、コンテンツの自明性を問うこと、そして学習者が自身の目的に沿った日本語を選び、自分自身のアイデンティティを表現できるような活動の重要性が指摘されている（佐藤・高見・神吉・熊谷 2016、村田 2016）。

以上のように言語と文化を組み合わせたプログラムの重要性は、多くの実践報告によって明らかにされている一方で、文化体験のテキストに関しては、テキストのコンセプトの

<sup>1</sup> 本稿の執筆は、1を村田、2～6を長谷川、そして内容のチェックを池田、竹山が担当した。

紹介が行われているものの（西野・川嶋 2010、熊野 2008）、テキストの開発のプロセスやそこで行われた検討について記述した報告は非常に少ない。

本稿では、所属大学で実施した文化体験プログラムを踏まえたテキスト開発のプロセスを分析し、開発の試行錯誤の中で、コンテンツ（文化情報）の扱い方、そして学習者主体の活動に関して、どのような方向付けがなされていったのか、そしてコロナ禍での状況を踏まえて、テキストにオンラインでの文化体験をどのように組み込んだのかを報告することで、言語と文化体験を融合させた教育に資する情報を提供することを目的とする。本稿では、まず短期プログラムの概要について述べ、次に短期プログラムで使用した教材のテキスト化について述べる。そして、最後に実際の短期プログラムおよび正規授業での実践を紹介し、オンライン文化活動の可能性について取り上げる。

## 2. 短期プログラムの実施概要

所属大学のグローバル教育センターで実施している短期日本語プログラム（以下、短期プログラム）の概要および文化体験用のテキストの開発に至った経緯について述べる。

所属大学では 2014 年度から毎年夏と冬に、主に海外協定校の学生 60 名程度を対象として 2 週間の短期プログラムを実施している。プログラムでは言語使用と文化体験を融合させ、日本語の運用力を高めるだけでなく、人との交流および社会や文化を深く理解する機会を提供している。参加者の国籍は、中国、台湾、韓国、アメリカを中心に、ロシア、イギリス等で、日本語レベルは初級から上級まで 4～5 レベルのクラスに分けられている。プログラムには毎回 100 名を超える学生ボランティアも参加しており、留学生との交流や日本語支援は、異文化理解、日本語・日本文化の見つめ直し、同世代の若者同士の友情を育む機会となっている。

表 1 にスケジュール例（2019 年度冬季）を示す。期間は 2 週間で、正味 9 日間の授業日の中で 4 回の文化体験を行った。浅草散策、江戸東京博物館見学、焼き鳥体験、着物の着付け体験である。週末には富士山周辺への日帰りバス旅行があり、授業最終日には最終発表と修了式が行われた。これまでの 6 年間のプログラムで行われた文化体験は多岐にわたり、例えば、日本舞踊、和太鼓、茶道、浴衣の着付け、盆踊り、七夕飾り、相撲部屋訪問、吉祥寺散策、江戸深川資料館見学、防災館見学、紙漉き、等である。短期プログラムでは文化体験を活動の主軸とし、2 日間で 1 つの文化活動が完結するようにデザインされている。例えば、浅草訪問の活動であれば、午前の授業で浅草について下調べをし、午後は実際に浅草へ出かけ、翌日の午前に発表を行う、という流れとなる。表 1 の第 1 週の火・水曜のように、まず 1 日目の午前の授業で事前活動を行い（準備タスク）、午後に現地活動として文化体験（現地タスク）を行う。さらに 2 日目の午前の授業で事後活動（事後タスク）を行う。午後の文化体験は全員共通のものを行うが、事前および事後活動については、各クラスの日本語レベルに応じて授業を担当する教員が適切なタスクの内容を検討し、難易度を調整して実施している。

【表1 プログラムのスケジュール（2019年度冬季の例）】

	月	火	水	木	金	土	日
午前	オリエン テーション	〈授業〉 事前活動	〈授業〉 事後活動	〈授業〉 事前活動	〈授業〉 事後活動	遠足 富士山周辺	自由行動
午後	歓迎パーティー	浅草散策 現地活動	自由行動	江戸東京 博物館見学 現地活動	自由行動		
	月	火	水	木	金	土	日
午前	〈授業〉 事前活動	〈授業〉 事後活動	〈授業〉 事前活動	〈授業〉 事後活動	〈授業〉 総括	チェックアウト 出発	/
午後	焼き鳥体験 現地活動	自由行動	着物体験 現地活動	自由行動	最終発表 修了式 さよならパーティー		

短期プログラムにおける課題点としては、以下の3点が挙げられる。まず、参加者の日本語レベルの差に応じた指導上の配慮の問題である。日本語以外を専攻とする初級前半レベルから、日本語専攻の上級レベルまでとかなり差があり、プログラム参加の目的も、日本語の習得より観光に重点を置き簡単な日常会話ができればよいと考える参加者がいる一方で、より高度でアカデミックな日本語の習得を望む参加者もいる。両者のニーズを満たすよう文化体験だけでなく日本語の習得の観点からも効果的な教材開発が必要とされた。二つ目は文化活動の固定化である。所属大学が東京に位置することから、実施する文化活動は東京で、しかも低コストで行うことができる活動に限定されていた。プログラム開始後7年を経て、今後さらに魅力あるプログラムとして継続させていくためにもこれまでの文化活動を振り返り総括を行い、活動の幅を広げる必要があった。三点目に、各レベルにおける文化活動の学習アレンジに明確な指針がなく、授業を担当する教員に一任されていたため、作成者によりプリント教材の質量にばらつきが見られた。以上のような課題点を踏まえ、本学の短期プログラムの特徴に合わせた体系だった教材が必要であると考え、教材開発に至った。

### 3. 文化体験のための教材開発のプロセス分析

2で述べたような課題点をもとに、所属大学の短期プログラムにおいて作成・蓄積してきた教材を、より広く利用してもらえる形にすることを目指してテキスト化する企画が2017年11月に立ち上がり、2021年2月に書籍『にほんごで文化体験』として出版されることになった。以下ではテキストの特徴を述べ、作成のプロセスにおいて行われた検討および変更点について分析する。

#### 3.1 教材の構成

『にほんごで文化体験』は、テキスト本冊と別冊の教師用ガイドに分かれている。

本冊の構成は、街歩き、食、地域文化・産業、交流、災害、伝統文化、季節のイベントの7つのテーマから成り（資料1）、各章の構成は、ウォームアップ、活動、語彙リストから成る（資料2）。対象となる日本語レベルはN3レベル程度の中級を主軸とし、漢字には総ルビをつけた。語彙リストは英語、中国語、ベトナム語でも示した。

もくじ contents

<b>1章 街を歩く</b> 011	<b>5章 災害に備える</b> 053
ウォームアップ 012	ウォームアップ 054
活動1 街を知る 013	活動1 災害について学ぶ 055
活動2 街の歴史を調べる 016	活動2 災害が起きたとき、どうする? 058
コラム—019 / 語彙リスト—020	コラム—061 / 語彙リスト—062
<b>2章 食を楽しむ</b> 021	<b>6章 伝統文化に触れる</b> 063
ウォームアップ 022	ウォームアップ 064
活動1 食レポにチャレンジ! 023	活動1 伝統文化を知る 065
活動2 料理にチャレンジ! 028	活動2 伝統衣装を知る 067
語彙リスト—033	語彙リスト—070
<b>3章 地域の文化・産業を学ぶ</b> 035	<b>7章 季節のイベントを体験する</b> 071
ウォームアップ 036	ウォームアップ 072
活動1 地域の文化を知る 037	活動1 お正月① 書き初め 074
活動2 ものづくりの現場を見学する 040	活動2 お正月② 年賀状 076
コラム—043 / 語彙リスト—044	活動3 セーター 078
<b>4章 地域の人と交流する</b> 045	語彙リスト—080
ウォームアップ 046	はじめに—002 / 本書の構成—004 / 本書の使
活動1 地域の活動に参加する 047	い方—005 / ダウンロード版「教師用ガイド」に
活動2 交流会を開く 050	ついて—006 / 付録「活動のための日本語」の使
コラム—052 / 語彙リスト—052	い方—007 / 本書の活用例—008 / 文化活動の
	学びの記録—009
<b>付録 活動のための日本語</b> 081	
<b>I. 文化体験のための活動例</b> 082	<b>II. 文化体験のための日本語表現</b> 110
① 場所やものを詳しく描写する 082	① 意見を言う 110
② 手順を説明する 090	② 発表の司会をする 112
③ 比較してコメントする 092	③ 質疑応答をする 113
④ インタビューする 094	
⑤ 調べた結果を発表する 100	
⑥ 交流する 104	
⑦ 手紙 (お礼状) を書く 107	
	★発表の自己チェックをする 114

**各章の最初のページ**  
 テーマに関する質問について話す

**ウォームアップ**  
 テーマについて知る・調べる

**【目的】**  
 ・テーマに興味を持つ ・背景知識を得る  
 ・知りたいこと、見たいこと、体験したいことが何かを  
 を考える

**活動**  
 テーマに沿った活動はそれぞれ独立しているため、状況や目的に合わせて活動を選ぶことができる

①活動の前に (事前活動) → ②やってみよう (現地活動) → ③活動を終えて (事後活動)

**①活動のための準備活動**  
 ・計画を立てる  
 ・情報収集をする  
 ・必要な表現を学ぶ など

**②実際に体験する**  
 ・現地で観察する  
 ・現地で情報を採る  
 ・質問をする  
 ・写真を撮る など

**③体験してわかったことを発信する**  
 ・プレゼンテーション  
 ・ブログやSNSに投稿する  
 ・お礼状を書く など

**語彙リスト**  
 各章の活動で出てくる語彙が提出順にリストになっている

**付録：活動のための日本語**  
 活動に合わせて適宜利用する

**I. 文化体験のための活動例**  
**II. 文化体験のための日本語表現**

【資料1 教材の章構成 (p.3 から)】

【資料2 各章の構成 (p.4 から)】

I. 文化体験のための活動例

②手順を説明する

▶手順を説明してみよう))

ポイントメモしよう

表現を確認しよう

例: 餅焼きを作る 手順	まず
①ボールに餅を崩り入れます。	↓
②塩と砂糖を入れます。	次に
③よく混ぜます。	↓
④フライパンで焼きます。	それから/そして
⑤切ります。	↓
	最後に

確認を確認しよう

例: 餅焼きの作り方

導入	みなさん、餅焼きを食べたことがありますか。簡単に作れておいしいですから、紹介したいと思います。
説明	①まず、ボールに餅を崩り入れます。 ②次に、塩と砂糖を入れます。 ③それから、よく混ぜます。 ④そして、フライパンに油を熱して焼きます。 ⑤最後に、切ります。
結び	餅焼きの味は、家庭によって違います。冷めてもおいしいので、お弁当にもよく入れます。ぜひみなさんも一度作ってみてください。

【資料3「付録 活動のための日本語」の例 (p. 90 から)】

★発表の自己チェックをする

▶発表についてふりかえってみよう))

フィードバックをしよう

・発表が終わったら、うまくできたかどうかチェックしてみましょう。  
 ・クラスメイトや先生にお願いしてもいいです。

テーマ: \_\_\_\_\_

ポイント	評価 (○をする)
1. 声の大きさ	まだまだだ・もう少しだ・ふつう・よい・とてもよい
2. 話すスピード	まだまだだ・もう少しだ・ふつう・よい・とてもよい
3. 文法	まだまだだ・もう少しだ・ふつう・よい・とてもよい
4. 発音	まだまだだ・もう少しだ・ふつう・よい・とてもよい
5. 内容	まだまだだ・もう少しだ・ふつう・よい・とてもよい
6. 表情や目線	まだまだだ・もう少しだ・ふつう・よい・とてもよい
7. 質問への答え方	まだまだだ・もう少しだ・ふつう・よい・とてもよい

コメント

例: 大きな声でわかりやすかった。

【資料4「付録 活動のための日本語」の例 (p. 114 から)】

また、付録の「活動のための日本語」は、文化活動においても日本語の知識を体系的に習得したいと考える学習者に対する配慮から生まれた。まず「I. 活動のための日本語」では、「場所やものを描写する」「手順を説明する」「比較してコメントする」「インタビューする」「調べた結果を発表する」「交流する」「手紙（お礼状）を書く」といった、活動における言語機能の部分のみを取り出している（資料3）。また、「II. 文化体験のための日本語」では、「意見を言う」「発表の司会をする」「質疑応答をする」といった、よりアカデミックな場面でも役に立つ表現をまとめて示している。「発表の自己チェックをする」ではふりかえり活動を想定した。いずれも文化活動に限らず普段の日本語クラスでも活用できるよう、汎用的な内容を提示している（資料4）。ただ楽しい活動を行って終わるのではなく事前活動と事後活動を日本語を使って行うことで、体験学習が言語学習と結びつき、学習者の日本語力を向上させ満足度を高めることができる。

別冊の「教師用ガイド」はダウンロード版とした。教師用ガイドの作成にあたり、いくつかの工夫を行った。まず、文化活動の指導・引率経験のない教師や日本語教育の知識・経験がないボランティアを想定し、なるべく細かな活動の手順と指導方法、注意事項を示した。また、本冊のワークシートは中級程度の学習者を主な対象としているため、教師用ガイドには「初級／上級のアレンジ例」を示し、幅広い日本語レベルで実施可能な授業のアイデアを活動ごとに示した（資料5）。さらに「オンラインアレンジ例」として地方や海外から参加している学習者がいる場合や遠隔授業を行う際の授業のアイデアを示した。これはコロナ禍で多くの授業がオンライン授業になる中で追加した項目であるが、今後は来日しなくても遠隔で文化体験が行えるような新しい学びの可能性を示唆している（3.2.5を参照）。「活動の注意点」では活動を行う際に気を付けるべき点を示した。例えば、食に関する活動の際はイスラム教の学習者への配慮を行う、施設見学の際には先方と注意事項を確認する、等である。

#### 初級アレンジ例

- ・形容詞を三つ使って食べ物の説明し、どの食べ物を表すか当てる（クイズ形式でも可）。
- ・食べ物の説明をし、どの食べ物を表すか写真を選ぶ（クイズ形式でも可）。

#### 上級アレンジ例

- ・インターネットのグルメサイトやガイドブックなどで人気の店を探し、口コミを読んでおすすめの店を発表する。
- ・地元の人にインタビューをして、おいしい店を探す。
- ・地域（学校周辺や居住地）のレストランを調査し、グルメマップを作る。
- ・ベジタリアン向けのレストランや、ハラールレストランを探してマップやガイドを作る。
- ・「和食」と自国の食文化を比較して発表する。
- ・食感を表す表現がほかにあるか調べてみる。

#### オンラインアレンジ例

- ・オンライン食事を聞き、自分が食べているものや自国の食べ物をほかの人に紹介する。
- ・レストランへ行き、オンラインで食レポをする。

【資料5 教師用ガイドの一部（別冊 p.7 から）】

## 3.2 テキスト化における検討および変更点

教材のテキスト化にあたり、短期プログラムや日本語教育プログラムの授業での試用を行い、学習者や教員からフィードバックを得た。また、他機関の教員や出版社の編集担当者からも外部の視点から貴重なフィードバックを得た結果、内容の検討および変更が何度か行われた。ここではそのポイントと経緯について述べる。

まず、教材の出発点としては、特定のプログラム、つまり所属大学の所在地である東京の大学や日本語学校における短期プログラムを想定していたため、東京および関東近郊で実施できる文化体験活動を中心に上げていた。しかし、より汎用的な教材に変更するために出版社からいくつかのポイントを指摘され、大きく発想の転換を行った。カギとなったのは、①対象者の属性や住む地域、日本語レベルを問わずに使用できる「汎用性」を高めること、②「地域の日本語教育」に貢献できること、さらに、③日本語教師のみならず、地域の「日本語ボランティアも使える、シンプルさ」を追求することであった。教材の変更点は表のとおりである（表2）。以下では、特に注目し変更した5つの点（対象、日本語レベル、活動の主軸、SNS利用、オンライン文化体験）について、詳しく述べる。

【表2 教材化における変更点】

	変更前	変更後	具体的な変更点
対象地域	東京（関東近郊）	全国各地域、海外	・固有名詞（地名や施設名）をなるべくカット ・「地域の産業と文化」の章を追加
対象機関	国内の日本語教育機関	国内外の日本語教育機関 地域の日本語教室	・「オンラインアレンジ例」を追加
対象者	大学生 日本語学校生	学習者 生活者	・学校のクラブ訪問から地域の活動訪問に変更
日本語レベル	中級メイン	初級から上級まで	・「初級／上級のアレンジ例」を追加 ・「これもやってみよう」を追加 ・総ルビをつける
活動の主軸	知識インプット 情報アウトプット	情報アウトプット	・予習の読み物をカット ・「活動の前に」の知識部分をなるべくカット（一部はコラム化） ・自分で調べる活動を増やす ・SNS等の利用を提案
学習方法	対面	対面とオンライン	・「オンラインアレンジ例」を追加 ・現地訪問活動と、教室や自宅で行える活動を選択できる

### 3.2.1 対象の広がり：「東京の学生」から「地域・海外の生活者・学習者」へ

テキストの当初の対象は、主に大学や日本語学校で学ぶ留学生と日本人学生、活動を支える教職員やボランティアを想定することとしたが、短期プログラムで使用している教材を広く国内外で使用できるテキストにするために、特定の地域の大学や日本語学校だけでなく、地域の日本語教育機関やボランティア教室でも使用できるように内容を拡充する必要があった。当初のテキストには「東京」で「大学生」を中心として行う活動という特徴が色濃く、「各地域」での「生活者」の視点に欠けており、より幅広い読者層をターゲットとすべく、例えば地域のボランティア教室なども意識した内容に方向を変更することとなった。そこで、地域的な汎用性を考慮し、東京・関東近郊に限定せず、日本全国の各地域、さらには海外の学習者・生活者にまで広げ、できる限り多様な地域の学習者に対応できるよう改訂を行った。具体的には、地名や施設名といった固有名詞をなるべく変更するとともに、その地域に文化体験の対象施設がなくても活動が行えるよう工夫した。例えば、街を歩く活動として当初は浅草、秋葉原、富士山といった東京近郊ではなじみの深い3箇所を取り上げていたが、ワークシートの例やコラムで触れるにとどめた。さらに、地

域密着型の活動が行えるよう「地域の産業と文化」という章を追加した。

### 3.2.2 多様な日本語レベルの学習者への配慮

体験学習を中心に据えたプログラムは、日本語の知識を習得することに価値をおく学習者にとって馴染みにくく、また、体験活動をするための日本語力が十分ではない場合、活動が負担となる（内海・宮城 2018）。加えて、体験活動のテーマに興味がない場合、満足度が得られにくい。対応策として、体験活動と言語学習の関係性を明確にし、学習者の学習スタイルを教員側も理解しておくこと、学習者の言語レベルに応じた柔軟なプログラムデザイン、そして、学習の学びを可視化するためのポートフォリオの活用など、配慮が必要となる。日本語力とテキストの内容理解にギャップがあり、学習者が共通して理解できる言語が日本語以外にある場合、二言語での教育も提唱されている（Chikamatsu & Matsugu 2009）。

以上のような視点から、本テキストにおいても多様な日本語レベルに配慮し対応できるような工夫をいくつか行った。まず、当初の軸は中級レベル（N3程度）であったが、より幅広いレベルに対応できるよう教師用ガイドに「初級／上級のアレンジ例」を追加した。表3にテキストでの活動と教師用ガイドでのアレンジ例を一覧で示す。上級の学習者や担当教員からはルビは不要との声も聞かれたが、漢字は総ルビとし、初級でも使用できるよう配慮した。また、各章の最後には語彙リストをつけ、英語・中国語・ベトナム語も併記した。さらに、文化活動の際に教室の内外で用いられる言語機能と表現を取り出し、付録「活動のための日本語」として独立させた。「描写する」「比較する」といった初中級の機能から、「お礼状を書く」「インタビューする」「意見を述べる」「質疑応答をする」といった上級のアカデミックな場面でも役に立つ機能と表現を集め、普段の日本語クラスでも単独で活用できるよう汎用性を高めた。

【表3 日本語レベルと活動アレンジの例（2章「食を楽しむ」のレベル別活動例から）】

レベル	活動例
初級	<ul style="list-style-type: none"> <li>・形容詞を使って食べ物を説明し、どんな食べ物かを当てる。</li> <li>・食べ物の説明をし、クイズ形式で写真から選ぶ。</li> <li>・料理体験を1アクションごとに写真に撮り、レポートする。</li> </ul>
中級	<ul style="list-style-type: none"> <li>・味や食感の語彙を身につけ、実際に店で食べ物を試食し、食レポをする。</li> <li>・料理に関する語彙を身につけ、調理方法を説明したり実際に作ってみる。</li> </ul>
上級	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グルメサイトやガイドブックで人気の店を探し、口コミを読んでおすすめの店を発表する。</li> <li>・料理の過程を寸劇にして撮影し、料理番組を作る。</li> <li>・日本料理の歴史や地域性を学び、自国と比較しながら発表する。</li> </ul>

### 3.2.3 「知識インプット」から「情報アウトプット」へ

次に「知識インプット」を縮小した。当初は予習部分を中心に読み物や情報を提供していたが、ふりがなや英訳があったとしても初中級の学習者にとっては難しいという問題があった。さらに、語彙や文法導入に時間を取られ、コースの趣旨とは外れてしまうという教師側からの指摘もあった。よって、情報や知識をこちらから与えるのではなく、学習者が自分で調べられるような形の活動に変更を行い、学習者が「知って」「体験して」「発信する」といった、活動を軸としたワークシート中心の教材形式に変更した。例えば、博物館を訪問する活動の場合、当初は江戸東京博物館など、東京のいくつかの博物館や美術



館について予習ページで紹介していた（資料6）。しかし、自分が住んでいる地域に博物館などがあるか、どのような特産品があるかを調べる活動に変更した（資料7、8）。

予習しよう : Preparation

日本の各地域には、その土地の歴史、社会、文化、技術などを見たり、体験することができる博物館や教育的な施設、工場などがたくさんあります。ここでは東京を例に取って、留学生に人気のある見学場所を紹介します。There are many museums and educational facilities or factories where we can learn and experience local history, society, culture, and technology. Here, we will introduce popular visiting places in Tokyo for international students.

<p>1. 歴史を知ることができる博物館の例</p> <p>江戸東京博物館 (東京・両国)</p> <p>江戸東京博物館では江戸時代から現代までの社会・経済・文化、人々の暮らしがわかります。</p> <p>◆江戸と東京の成り立ちから学ぶ歴史</p> <p>「江戸」は東京の古い名前で、1603年から1867年まで江戸幕府が置かれていました。「江戸」の由来は、川の入り江の口です。1590年、徳川家康が江戸に入りました。そのころの江戸は湿地が多い、荒れ果てた土地でした。家康は埋め立てや水道・運河の整備を行い、町割りをしました。江戸は下水道の整備、ゴミの収集やリサイクルが定着した、世界でも最先端の</p>	<p>1. Museums that Teach Japanese History</p> <p>• <i>Edo-Tokyo Museum</i> (Ryogoku, Tokyo)</p> <p>At the <i>Edo-Tokyo Museum</i>, you can learn about the society, economy, culture, and daily lives of the people from <i>Edo</i> period through modern times.</p> <p>• The History of <i>Edo</i> and Tokyo</p> <p>“<i>Edo</i>” is the original name of Tokyo, where the <i>Edo</i> shogunate government was located between 1603 and 1867. The name “<i>Edo</i>” means estuary, inlet door. In 1590, Shogun <i>Ieyasu Tokugawa</i> relocated to <i>Edo</i>. At the time, <i>Edo</i> was a marshy wasteland, and <i>Ieyasu</i> developed the town by reclaiming the land and constructing waterworks and canals. As <i>Edo</i> was established to maintain sewage lines, trash collection, and recycling systems, it grew into one of the most advanced cities in the world.</p>
--	--

【資料6 変更前の例（博物館訪問のための予習用読み物）】

3章

地域の文化・産業を学ぶ

- あなたが住んでいる地域に次のものがありますか。  
博物館 / 美術館 / 郷土資料館  
観光案内所 / 道の駅 / 歴史的な建物
- あなたが住んでいる地域の特産品を知っていますか。
- あなたが住んでいる地域が出身の有名な人を知っていますか。

【資料7 変更後の例 (p.35 から)】

活動1：地域の文化を知る

今、住んでいる地域の文化について、調べて発表しましょう。

▶ 活動の前に ~調べよう~

あなたが住んでいる地域のさまざまな文化について調べましょう。

カテゴリー	あなたの地域 ( )
② 特産品	
② 有名なところ、観光地 (城、寺、神社)	
③ イベント、行事 (祭り)	
④ 方言	
⑤ 有名な人 (偉人)	
⑥ ご当地キャラクター	
⑦ その他 ( )	

【資料8 変更後の例 (p.37 から)】

CBI を用いた日本語・日本文化プログラムの例として、事前に予習課題（読み物と問題）を WEB 上にアップしておくといった方法も報告されているが（松田・藤井・高木・長谷川 2013）、このテキストではあえてほとんどのインプット部分を削ぎ落とした。言語学習と体験学習の連動については 1 でも述べているが、テキスト化にあたり、インプットからの脱却、つまり知識重視から発信型活動への転換が大きなカギとなった。実際に読み物の部分については学習者の評判もよく、知識を削ぐことは知的な部分を削ぐように感じられた。しかし、自明性や既存の知をカットすることで、学習者の自律学習能力をより向上させることが可能になる。加えて、情報量が著しく増えた現在、授業で習得した知識やことばの勉強だけではなく、現代の日本を理解し、日本社会・日本人の意識や行動に対して関心や疑問を持ち、それについて真剣に考える力を養うことが到達目標となる（小川 2013）。「調べればわかる」事柄を提示するのではなく、いかに自分で考え、必要な情報を得て発信できるかが重要であり、その力を養うことこそが知的な活動だと考え、上のような変更を行った。

### 3.2.4 アウトプット活動としての SNS の活用

文化体験を行った後、教室に戻って事後活動を行う際に、最も主要な活動は発表である。この教材では活動の詳細や感じたこと、わかったことについて報告する形式の発表活動が多く、発表に用いられる構成や言語表現が身につくよう、ワークシートも工夫した。一方、インターネットや SNS が発展・普及している中で、体験したことをさまざまなチャンネルから発信していくことの可能性についても提案している。ワークシートの「これもやってみよう」部分では、インターネットや SNS を利用した発信型の応用活動の提案を行っている（資料 9）。例えば、街の魅力について動画を作成し投稿する、食レポや料理の動画を撮影し動画共有サイトに投稿する、グルメサイトにレストランのクチコミを投稿する、防災に役立つ情報を地域に住んでいる外国人に向けて SNS などでも発信する、などである。

**これもやってみよう!** .....

- ・街の魅力や歴史について動画を作成し、SNS や動画共有サイトなどで紹介してみましょう。
- ・実際に行った入は、発表した内容を旅行サイトに口コミとして投稿してみましょう。

【資料 9 発信型の応用活動の提案例 (p.15 から)】

### 3.2.5 オンライン文化体験のアレンジ

教師用ガイドには、地域あるいは海外在住の学習者に遠隔授業を行う際のオンラインアレンジのアイデアを入れた（表 4）。コロナ禍で多くの授業がオンライン授業になる中で追加した項目であり、来日しなくても遠隔で文化体験が行えるような活動のアイデアを提案した。例えば、Google ストリートビューを利用してバーチャル街歩きをする、自国の市場などを案内し現地の料理の作り方を紹介するなどである。

【表4 オンライン文化体験のアレンジ（一部）】

テーマ	活動内容	オンラインアレンジの例
1章 街を歩く	街を知る	・インターネットのGoogle ストリートビューなどを利用して、バーチャルで街歩きをする。 ・バーチャルで内部が見られる博物館や美術館などの施設を探してみる。 ・学習者が住んでいる街や学習者の国の観光地について、日本語で紹介する動画やマップを作成し、発表する。自国で日本と関係のあるスポットを紹介してもいい。
	街の歴史を知る	・学習者が住んでいる街や国の観光地について、昔と今を比較して発表する。
2章 食を楽しむ	食レポにチャレンジ	・オンライン食事会を開き、自分が食べているものや自国の食べ物をほかの人に紹介する。 ・レストランへ行き、オンラインで食レポをする。
	料理にチャレンジ	・自宅のキッチンから料理を作りながら中継し、作り方を紹介する。 ・学習者が海外からアクセスしている場合は、自国の市場などを案内してもらい、現地の料理の作り方を紹介してもらおう。
3章 地域の文化・産業を学ぶ	地域の文化を知る	・現地の特産品や有名人、有名なイベントなどを紹介する。 ・博物館や美術館のバーチャルサイトなどを利用して展示品を紹介する。 ・現地の郷土資料館や博物館から展示品を紹介する。
	ものづくりの現場を見学する	・現地のものづくりの現場（例：酒蔵、お菓子工場、工房など）を紹介する。

以上、教材の汎用性を高めるために行われた検討および変更・加筆の各ポイントについて述べた。これらの変更により、地域や機関、対象者の属性、日本語レベル、授業形態を問わず、文化体験の授業を行うことができるよう改良を行った。教師やボランティアにとっては、経験を問わず、リソースや環境に応じて活動を選択することができるようになる。また、学習者にとっても、体験したことや感じたことを教室にとどまらず広く発信することで、地域や社会、他者とつながる実感が得られ、学習意欲の向上につながる事が期待される。

#### 4. 文化体験の実例

以下では、実際の短期プログラムにおいて学習者がどのような活動を行ったのか成果物を紹介しながら述べたい。また、短期プログラムのみならず、一学期間の正規授業においてオンラインで活動を行った例についても紹介する。

##### 4.1 実際の学習者の活動例（短期プログラムから）

所属大学の短期プログラムにおいて実際に参加者が行った活動と成果物について紹介する。資料10は浅草で食レポを行った学習者の動画スクリプトである。午前の教室授業での事前活動では食べ物の味や匂い、食感などの表現を学び、食べ物を使って練習を行った。午後、実際に街に出て揚げ饅頭を食べながら食レポを行い、撮影した動画を提出した。教室で学んだ「サクサク」「上品な味」「香ばしい」といった語彙をしっかりと使い、食べ物の断面も見せながらレポートを行うことができている。資料11は江戸東京博物館を訪問した際の印象的な展示物についてスライドを作成し、発表を行った学習者のスクリプトである。午前の事前活動では江戸時代の歴史や文化などについて調べ、午後、実際に博物館を訪問し見学しながら、印象に残ったものについて探す活動を行った。この学習者は江戸時代の身分の高い女性（将軍の妻）の輿に注目し、中国の乗り物と比較しながら説明を行っている。乗り口の狭さから当時の人の身長まで推測している点が印象的である。また、クラスには韓国人学習者もいたため、スライドでは日中韓の乗り物の写真を並べて見せた。単におもしろいと思ったものを紹介するだけでなく、自国や他国との比較という視点から理解を深め、発信する活動となった。

みなさん、こんにちは！今日は浅草に来ています。揚げまんじゅうの名店に来ました。いい匂いがします。じゃあ、いただきます。＜食べる＞聞こえますか、この音。サクサクの。あんこも入ってるし、すごくおいしいです。甘いけど、そんなに甘すぎないです。上品な味がします。あと、抹茶の揚げまんじゅうも買いました。これです。＜食べる＞ああ、ぼくはこっちの方が好きですね。抹茶が香ばしいって感じで、おいしいです。みなさんも浅草に来たらぜひ食べてみてください。じゃあ、今日はこれで。



昨日、見つけたものについて発表したいと思います。写真をご覧ください。これは江戸時代、身分の高い女性が使用した乗り物です。とても大きく、装飾がきれいで、とても印象に残ったので選びました。私の国中国にも同じようなものがありますが、形は日本のものとは比べるとずっと高くて中は狭いです。日本のものと共通している点は、身分が高い人が使うということです。日本のものは松や竹や花などが描かれていて、とても豪華で、身分の高い人が乗るものだと思えます。でも、乗るところが意外と狭かったので昔の人は小さかったのだと思いました。以上で私の発表を終わります。

【資料10 学習者の発表スクリプト（食レポ）】

【資料11 学習者の発表スクリプト（江戸東京博物館）】

## 4.2 実際の学習者の活動例（「日本語応用」オンライン授業から）

所属大学の日本語教育プログラムにおける「日本語応用」授業においても、短期プログラムと類似した枠組みにより、一学期間の文化体験活動を取り入れた授業を行っている。2020年秋学期はオンライン授業となり、全ての学習者が自国からの参加となったため、本来行う予定であった現地文化活動を削り、調べて発表する活動を増やした。世界的なコロナ禍のため、住んでいる街を歩いたりレストランなどで取材してくるといった活動を行うように指示することは安全上できなかったが、学習者の知っていることや関心について話し合ってから調べたことを発表し、議論するという方式をとった。

「街を歩く」の活動では、自宅でパソコンを利用して行えるように、行ってみたい場所や紹介したい場所について発表することとした。準備として、発表の構成と日本語表現を確認し、ひな形に従って原稿とスライドの作成を行った。対象場所は、①日本の中で紹介したい場所、または②自国の中で日本と関係のある場所、としたが、他の全員が①を選ぶ一方で、学習者Aは②を選び、シンガポールにある戦没者墓地を紹介してくれた。ここには第二次大戦中に日本軍と戦って命を落とした戦没者が眠っている。資料12に実際の発表スクリプトを紹介する。学習者Aは中級レベルだが、原稿のひな形を使用することでスムーズに準備ができ、自国の特定の場所について日本との歴史的つながりに注目して報告を行うことができた。クラスメートからは、シンガポールについて新しい面を勉強した、シンガポールの歴史について知ることができた、機会があれば行きたいとのコメントが出された。学習者Aは現地付近の地図や墓地内部の写真を多用して発表を行ったが、もし本人が実際に現地を訪れて動画等を録りながらレポートできれば、オンラインでの体験という意味合いはより深まったと思われる。しかしながら、日本に在住していない学習者Aにとっても、日本と自国との関係性を考え、批判的な考察も含めて日本語で発信する機会となった。授業後のアンケートで、学習者Aはこの授業がオンライン授業だったことに対し

で満足しており、また、日本語能力が伸びたかについて「そう思う」とし、伸びた能力については4技能全てを挙げている。日本への理解が深まったかについては「そう思う」とし、理由として「特に発表の準備を通して理解が深まりました」と答えている。オンラインでの活動であっても日本文化への理解と日本語能力向上に一定の効果と満足感を得られるものとなったものと考えられる。

こんにちは。〇〇です。今日は克蘭ジに紹介したいです。選んだ理由は、シンガポールの義務教育のプログラムによって、ほとんどのシンガポール人が少なくとも1回行ったことがあります。墓地だから、感じ悪い場所を期待させるけど、たいていびっくりさせるようにとてもきれいなところと思います。

(地図を見せて)これは、克蘭ジにいます。シンガポールの北です。克蘭ジ駅から散歩するのは1分ぐらいです。入場は無料です。4000以上の墓碑と69人の集団墓地があります。メモリアル表で、2万以上死体が見つけられない軍人の名前が表示しています。毎年11月11日に追悼式をしています。メモリアルそばには、シンガポールの第一と第二の大統領も埋葬しています。第二次世界大戦中に、東南アジアの戦う間に、殺されたイギリス人、オーストラリア人、カナダ人、マラヤ人やインド人が4000人以上埋葬されています。書いてあるメッセージは、「彼らは自由のために死んだ」。1942年の2月15日にシンガポールは日本に降参しました。軍人の4万人の降参したあとで、イギリスを裏切って日本の側に移りました。この情報を聞いたとき、メモリアルで書いてあるメッセージはおかしい気がしました。シンガポールのために戦った軍人たちはいっしょに戦わなかったみたいです。もしいっしょに戦えば、そんな簡単に移らないわけでしょうか。それなら軍人たちも自由をもらわなければ、自由のために死んだは、ちょっと苦しいじゃないでしょうか。実は、どんなにきれいでも、墓地だから、シンガポールに行けば、おすすめしないです。

これで、克蘭ジ墓地についての発表を終わります。ご意見、ご質問がありましたらよろしくおねがいたします。ありがとうございました。



<https://motherhip.sg/2017/07/amazing-drone-footage-of-kranji-war-memorial-gives-a-stunning-view-of-the-place/>

#### 【資料12 学習者Aの発表スクリプト（街を歩く）】

以上は「街を歩く」活動の一例だが、近年ではさまざまなオンライン活動が整備されてきている。たとえば、バーチャル旅行ツアー、オンライン舞台鑑賞、オンライン着付け、オンライン茶道、オンライン書道、オンライン料理教室、オンライン工場見学などである。そのようなものを利用すれば、現地訪問せずとも文化体験を行うことができる。日本で実際に行う文化活動が最良と思わず、学習者の置かれた環境に配慮し、その中で必要なものはオンラインで行うことを考えていくべきであろう。

## 5. 考察：対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド体験に向けて

以上、文化体験を中心に据えた短期プログラムの概要および教材開発プロセスについての考察を行った。また、実際の短期プログラムおよび正規授業における実践を紹介した。文化体験の教材開発において重要な点は、どこでも（地域）、だれにでも（対象）、どんな手段でも（対面・オンライン）活用できるように「汎用性」を追求することであった。また、知識インプットではなく、自分で考え、必要な情報を得て発信する活動へのシフト

が重要なカギとなった。日本語レベルに応じた配慮を行うことで、体験活動と言語学習の関係性が緊密なものとなり、学習者の満足度も高めることができる。さらに、地域あるいは海外在住の学習者に遠隔授業を行う際のオンライン文化体験のアレンジについても提案を行った。

2020年度の短期プログラムはコロナ禍により実施することができなかったが、今後はオンラインと文化体験活動との組み合わせも含めて、文化体験プログラムをさらに拡充させるとともに、対応する教材開発を続けていきたい。また、教室の学習者とオンラインの学習者が混在する、いわゆるハイブリッド方式の文化体験および授業プログラムについても効果的な指導方法を提案していきたい。

## 参考文献

- 阿部美恵子・釜淵優子・吉兼奈津子・柳圭相（2015）「短期プログラムにおける活動間の連携の可能性—日本語授業・交流授業・文化講義・文化体験の有機的な結びつき—」『関西学院大学日本語教育センター紀要』4:5-19.
- 内海陽子・宮城徹（2018）「2017年 TUFS ショートステイプログラム—『異文化体験型シラバス』実施の成果と今後の課題—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』44:235-250.
- 小川都（2013）「留学生に必要とされる『一般日本事情』のあり方」『専修大学外国語教育論集』41:105-113.
- 熊野七絵（2008）「関西国際センターから生まれた新刊教材『日本語ドキドキ体験交流活動集』」『JF 便り<日本語教育編>』12  
[https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/archive/jf\\_report/12.html](https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/archive/jf_report/12.html)
- 佐藤慎司・高見智子・神吉宇一・熊谷由理編（2016）『未来を創ることばの教育をめざして—内容重視の批判的言語教育(Critical Content-Based Instruction)の理論と実践—』ココ出版
- 西野藍・川嶋恵子(2010)「国際交流基金レポート（12）体験交流活動を通じた学習のデザイン」『日本語学』29(13):98-107.
- 藤森弘子・宮城徹・中村彰・荒川洋平（2013）「異文化体験型シラバスにもとづいたショートステイプログラム 2012 の実践と課題」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』39:137-152.
- 松田真希子・藤井清美・高木佳奈・長谷川桂子（2013）「Content-based を志向した短期日本語・日本文化プログラムの開発と評価」『日本語教育方法研究会誌』20(1):6-7.
- 松尾憲暁・福富七重・加藤淳・初鹿野阿れ・椿由紀子・徳弘康代（2018）「NUSTEP 修了生に対するアンケート調査—超短期日本語プログラムの学習効果に関する一考察—」『名古屋大学国際教育交流センター紀要』5:19-32.
- 村田晶子(2016)「日本語教育と社会科学関連の教育の接点における CCBI の考察」佐藤慎司・高見智子・神吉宇一・熊谷由理編『未来を創ることばの教育をめざして—内容重視の批判的言語教育(Critical Content-Based Instruction)の理論と実践—』ココ出版、279-295.
- 村田晶子監修・長谷川由香・池田幸弘・竹山直子著（2021）『にほんごで文化体験』アルク
- Chikamatsu, N. and Matsugu, M. (2009). Bridging Japanese Language and Studies in Higher Education: Report from the Forum on Integrative Curriculum and Program Development, Association of Teachers of Japanese Occasional Papers, 9:1-28.